国立国語研究所学術情報リポジトリ

パネル・ディスカッション

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿辻, 哲次, 小駒, 勝美, 柴田, 実, 横山, 詔一, 棚橋, 尚子, カイザー, シュテファン, 高田, 智和 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000904

パネル
ディスカッション

日本語文字・表記の難しさとおもしろさ

パネリスト◆阿辻 哲次／小駒 勝美／柴田 実／横山 詔一／棚橋 尚子／シュテファン・カイザー
司会◆高田 智和

高田　質疑応答ならびに討論の時間に移ります。司会は引き続き国立国語研究所の高田が務めます。どうぞよろしくお願いします。

それでは、会場の皆さまからいただいた質問を基に討論、質疑応答を行います。時間の都合もあって、すべてのご質問、コメントに対してお答えすることはできません。誠に申し訳ありません。

では、まず阿辻先生へのご質問からです。

阿辻　私のところには二つの問題をいただいています。一つは、「中国で作られた漢字が直接または朝鮮半島を経由して日本に入ってきた後、かなり短時間で片仮名、平仮名が生まれたと理解しています。一方、ハングルはかなり後になってからだと思いますが」ということで、これは時間的な差をお尋ねいただいているのかと思います。もう一つの問題は、「現在の中国の簡略化字体の漢字はあまりにも省略されていて、意味がもはや明快ではありません。こうなったのはなぜか、あるいはどのような背景と考えられるか」。この二つのご質問です。

最初の方ですが、まず日本人は平仮名、片仮名を早い時期に作り、それを交ぜて使うという独自の文化を形成しましたが、平仮名、片仮名はそれぞれ発生の由来と言うべきものがあります。まず片仮名は、お坊さんが仏教のお経を勉強するときに、お経を暗唱しなければいけないので、漢字で書かれている文章を日本語で読むときの発音のルビに当たるものを開発していくわけです。その段階で、今、明らかになっている研究では、もともとは筆に墨を付けて書くのではなくて、角筆と呼んでいますが、竹の棒を尖らせたまま紙をめり込ませる形で、いわばカンニングペーパー的に書いたものだったのだろうと推察されます。そのときに、この字はこう読むのだと、自分が分かる符丁を作りました。例えば私の名前の阿辻の「阿」のこざとへんだけを使うと「あ」と読める、あるいは伊藤さんの「伊」の

高田 智和

にんべんだけを使うと「い」と読めるなど、お坊さんが仏教経典を学習する段階で音読するためのサポートとして開発されました。

一方、平仮名の方は女手と呼んでいますが、『枕草子』や『源氏物語』など、宮廷の女性たちが和歌あるいは物語などを草書体で書き、それがインテリの女性の中で草書体で広まっていきました。当初は片仮名は仏教の世界、平仮名は女流文学の世界という発生の由来がそれぞれバックにあり、随分後の時代まで仏教は片仮名で、物語は平仮名でというすみ分けのようなことがありました。

一方、朝鮮半島のハングルは１４５０年代に世宗（セジョン）という王様が、民衆の文化の向上のために民族語を書き表せる合理的なシステムの開発を命じられてできたものです。ただ、語弊があるかもしれませんが、ハングルは伝統的な中では女子どものための文字で、知識人や正規の文章は漢字、漢文で書くのだとされました。テレビドラマ「宮廷女官チャングムの誓い」では、宮中に仕える身分であれば女性でも漢字、漢文を使っています。第二次世界大戦が終わり、日本が朝鮮半島から撤退して後、民族文化の興隆もあってハングルが興隆しているのが現実です。大変簡単ですが、時間の関係で次の問題に移らせていただきます。

阿辻 哲次

現在の中国の簡略化字体は日本人の目から見ると大変分かりにくいものですが、中国語の発音が分かっている人間には簡単に読めるところがあります。例えば除夜の鐘の「鐘」はかねへんに「童」ですが、今の中国ではかねへんに「中」と書きます。これは全然わけの分からない簡略化字体だと多くの方はお考えになると思います。しかし、「鐘」と「中」はどちらも中国語では同じzhongという発音になりますので、かねへんに「中（zhong）」であれば、ゴーンと鳴らす「鐘」です。中国語の発音が分かっていれば、現代式の形声文字と理解できるものがたくさんあります。ただ、そうでないものももちろんあり、漢字の「漢」はさんずいへんに又を書くのですが、あれは単に記号化しているだけの話です。記号化しているものは簡略化の仕方として合理的ではありませんが、中には新しい中国での形声文字という形で簡略化字体ができているものがあります。中国人が読んだらほとんど不自由はしません。それこそ文章の流れの中であの文字を見ますと、中国語として使うのだったら理解できるという状況です。

高田　今の簡体字の件にも関連しますが、横山先生に、簡体字、繁体字、日本の常用漢字の字体との間で、字体の好みに差があるのかという質問が来ています。

横山　台湾の大学で日本語を勉強している大学生を対象に、日本の旧字体と新字体の好みについて調査したことがあるのですが、日本で学んでいる留学生の人もそうですが、やはり台湾の方はどちらかというと繁体字、それに対して大陸の方は簡体字を好む傾向が見られるようです。もちろん日常生活でそういう文字の形によく接していて馴染みがあるので、それが好みになっていくのだろうと思います。

阿辻　補足します。近ごろは大阪でもそうですが、東京でも英語とハングルと中国語は簡体字と繁体字の二つの表記が駅などに書

小駒 勝美

かれていることがあります。例えば「いらっしゃいませ」は「熱烈歓迎」と書きますが、これを現在の中国で使っている漢字で書いてあっても、旧字体で書いてあっても、中国人であればどちらでも読めることは間違いありません。そのシチュエーションにおいて「よくいらっしゃいました」ということはもちろんよく分かるわけですから、簡略化字体であろうが繁体字であろうが、分かることは分かるのです。ただ、民族的なアイデンティティとでもいうのでしょうか、台湾の特に年配の方は「おれたちの大切な漢字をおれたちに相談もせずに勝手に簡略化しやがって」のようなイメージがあるから、簡体字に対して批判される方がいらっしゃいます。しかし、申しましたように、中国語が読み書きできる人間から見れば、どちらの文字で書こうと読めるものであるということは間違いのない事実だと思うのです。あとは民族的なプライドの問題だと思います。

高田　続いて小駒先生へのご質問です。

小駒　「漢字や振り仮名がどんどん変化したり、新しく作られているとおっしゃっていましたが、校閲者として一つ一つ作者に確認しているのでしょうか」というご質問です。

　特に今までなかった漢字を使った場合は、普通の形では組版できませんので、新たに字を作らなければいけないのです。これを「作字」といっています。そのとき「本当にこれでいいのですか。この形を意図しているのですか」と確認します。ただ、読み方については、常識の範囲内で考えられるようなものであれば、「ああ、このつもりで書いたのだな」ということで、これでいいとします。それを超えるような読みについてはもちろん一つ一つ確認しています。

高田　ありがとうございます。次は阿辻先生と小駒先生に共通のご質問です。

阿辻　今お手元に届けていただいたご質問です。「日本語の音は漢字音ですが、北京や上海のように従来にない発音が表れています。一方、従来の音で読んでいるケースもあります。今後どうなるのか」。それから、「音の種類にもう一つ現代音が追加になるのでしょうか。さらに字音も変わっていくのか」。

　まず北京と上海ですが、一番分かりやすいのは香港だろうと思います。「香港」と書いて現在の中国語ではXianggangと発音します。中国からの留学生に対して「ホンコン」と言っても通じないのが普通です。なぜ「ホンコン」かといいますと、あれは現地の香港方言、広東方言なのです。中国は広い国なので方言がたくさんあって、南方の広東省で話されている広東方言ではこの2文字をHeunggongと発音します。ジャッキー・チェンなどの香港映画でしゃべっているのは広東方言です。1840年のアヘン戦争によって香港はイギリスに租借地として割譲され、そこで現地のHeunggongの発音が英語に外来語として入ってHong Kongになりました。

　同様に広東方言で北京のことはBakgingと発音します。今の中国語ではBeijingで、オリンピックではBeijingと書いてあったのを覚えていらっしゃると思います。あれを「ペキン」と読むのは、Bakgingという広東方言が英語に入って、kingという音で読むようになったのです。現在の中国語でkingの音はありませんので、あれも明らかに方言の音です。上海は

そのままShanghaiと発音します。

ただ、北京、上海、南京、廈門など、中国の地名でわれわれに馴染みのない漢字音で読むのは大きな町ばかりです。例えば天津、徐州、成都など大多数の地名はわれわれが知っている漢字の発音で読んでいます。北京、上海、香港、南京、廈門などは割と英語に入った例外的な発音の結果、それが英語経由で日本語にも入ってきているという実情があります。中国の地名はすべて中国語で発音するというご意見の方もいらっしゃいますが、中国語では「東京」をDongjingと発音します。日本の地名が中国語では日本式には読まれないのと同じように、双方ともに漢字音を使って発音しますので、音読みがその結果増えることにはならないと思います。

それから、現代音が追加されるのは、私が個人的に見たケースでは、「小」と、「食べる」という動詞を表す「吃」を書いて、おやつや点心などを表す言葉「小吃（xiaochi）」というものがあります。「軽食」の意味なのですが、それに片仮名で「シャオチー」と振って、グルメ雑誌などで「横浜のおいしいシャオチー」などと書いてあります。あるいは「餃子」など、中国の食文化の名称が日本語の中に浸透はしていますが、漢字施策としてそういう発音を認定することではないだろうと思います。

高田　小駒先生、辞書、辞典ではいかがでしょうか。

小駒　今の「小吃」のようなもので、青梗菜（チンゲンサイ）、青椒肉絲（チンジャオロース）、麻婆豆腐（マーボードウフ）がどこまでが中国語なのかよく分からないですが、そういうものは辞書にその音を書くときにどうするかといいますと、やはり中国音としか書きようがないので、今回の辞書には、私は「㊥」と仕方なく入れました。１００や２００は入っていると思います。入れたくて入れたわけではないですが、どうしようもないのです。呉音でも漢音でもなく、訓でもないので、それは「㊥」とでもしておくしかないだろうという判断でそうしました。そういうものは今後もいっぱいあることはあると思います。食べ物が主だと思いますが。

高田　ありがとうございます。この件に関して、柴田先生、放送ではどうなっていますか。

柴田　これはほとんど固有名詞扱いにしています。例えば麻婆豆腐（マーボードウフ）、青梗菜（チンゲンサイ）は固有名詞扱いとして、例外として扱ってしまいます。それを一般的に広げることをしないというところで止めています。

高田　では、続けて柴田先生へのご質問にお答えください。

柴田　今日お集まりの皆さんは相当レベルが高くて、細かいところまで目が届く方が多いので、そういうご質問が来ています。「ＮＨＫで独自に使っている漢字の中に、『挽歌』や『挽回』の『挽』の字がありますが、あれは音読みだけで使っているのか、訓の「ひく」でも使っているのか」というご質問です。

結論から申しますと、音だけ使っています。なぜかといいますと、「ひく」は別に字数が減るわけでもないですし、恐らく使う場面は「挽き肉」ぐらいしかないだろうと思われます。「挽き肉」はずっと「ひき肉」と書いていましたので、ご利益がないということが一つあります。

それから、この漢字をどういう熟語で使うか、あるいはどういう単語で使うか、またそ

柴田 実

の単語の頻度なども考え合わせますと、「挽歌」「挽回」はほかの言葉で置き換えることが難しい、なおかつ北海道を舞台にした『挽歌』などいろいろ使いたい場面が多いという現場の声がありましたので、これは視聴者の皆さんのご理解を得られる範囲だと総合的に解釈して使うことにしました。

漢字はどういう場面で使うのか。ルールで音訓をそろえるのか。どちらかというと原則に立てば分かりやすいのですが、原則に立つと逆に例外が多くなることもある、非常に扱いにくいものかなと考えます。

それから、「ＮＨＫの『用字用語辞典』では『取り引き』は『り』と『き』を送るのですが、送らない場面もある。送らない方が正しいのではないか」というご質問です。これも原則から言いますと、ＮＨＫでは「裏で取り引きをした」のように動作性がある場合には送り仮名を送ります。「ヤミ取引」や「現物取引」のような名詞性の強いものは送らないことになっていますが、これは表記の方言性というのでしょうか、そのジャンルによって違います。

似たようなものですと、警察関係では「交通取締り」があります。「取り締まりを行う」という場合には「り」「まり」を送るわけですが、いわゆるねずみ取りの「交通取締り」は送らないことに決めています。それは経済、警察などの特定のジャンルで慣れ親しんだ書き方（方言的な表記）と一般的な表記（共通表記）とは少し違うという問題が出てきているのが尾を引いているところだろうと思います。例えば「引き換え」「書き替え」「貸し越し」「借り越し」などの用語についてはそういう問題をずっと引きずっていて、各新聞社ともにルールを設けています。外から見ると「いいかげんだな、どっちかにしろよ」と思うかもしれませんが、一応そういう取り決めをしています。

これはほかの面でも、例えばいわゆる正字といわれている康熙字典体を使う固有名詞と、そうではなく標準的な簡略な形に戻した固有名詞のどちらを使うかというのと似たようなことで、言葉は悪いですが、その世界に特有の方言的な表記と一般的な表記とのせめぎ合いが出てきているところだろうと考えています。

高田　どうもありがとうございます。棚橋先生に、振り仮名に関して、ご発表では端折られたところにたくさん質問が来ていますので、補足の説明をしていただきたいと思います。

棚橋　先ほどは振り仮名のことについて説明を少し端折りました。振り仮名については、ご質問の中でその有効性についてご意見をくださった方もあるのですが、若干補足させていただきたいと思います。

簡単に言いますと、私はこれからの表記で振り仮名をこれまで以上に多用していったらどうかと思うのです。それには二つ理由があります。一つは、振り仮名を付けて漢字を見せることで、漢字が習得できるということです。私は過去に振り仮名の効果を検証するために、４年生から６年生の児童５００名ほどを対象に調査をしたことがあります。その調査について簡単に説明しますと、まず、子どもたちを二つのグループに分けました。そして、一つのグループには普通の教科書を、もう一つのグループには、一部の熟語をルビ付

棚橋 尚子

き漢字に直した調査用教科書を使ってもらい、双方のグループに同じように読解の授業をしてもらいました。つまり、一方のグループはルビ付き漢字を授業中、「とにかく目にしている」という形になります。もちろん、授業の際にその漢字を特に学習することはありません。一通り授業を行った後にルビ付きにした漢字についての読み書きの調査をしたのですが、読みについては明らかにルビ付き漢字を見ていたグループはできるようになっていました。これは、皆様の経験からもよく分かれることだと思います。ところが、少し驚いたのは書きの結果です。先ほども申し上げたように子どもたちはこれらの漢字について書く練習は一切していませんが、ルビ付きで目にしていたグループの方は、統計的に見て有意な結果でその漢字が書けるようになっていたのです。

私ごとですが、昔、私より少し年長の方々が、立川文庫で漢字が読めるようになった、書けるようになったとよくおっしゃっていて、本当かなと思っていたことがあります。ところが、自分でこの調査をして、それはある程度本当であることが分かりました。ということで、漢字の習得にルビを積極的に活用すべきであると申し上げたいと思います。

それから、心理学の知見では、ルビ付きでテキストを提示して読解させた方が、より深い読解ができるという結果も出ています。浅いレベルの読解ではそうでもないのですが、深いレベルの読解になると効果があるというのです。ある高等学校の先生から伺った話にそれと似たような話があります。皆様もご存じのように、一口に高校といってもいろいろなレベルがあって、その高校は小学校2年生程度の漢字すら十分に読み書きできない人が少なくない高校なのです。そうすると、先生方は大層苦労されることになります。例えば芥川の『羅生門』などを授業しようと思っても、高等学校用のテキストでは授業しにくい、つまり生徒さんたちが読めない、理解できないということが起こります。そこで、その高校の先生方は大型の古本店を回られて、一冊100円ぐらいだと思うのですが、クラス人数分の小学生用の総ルビの『羅生門』の本を買ってきて生徒に与えられるということをされました。それで、授業をされたのですね。すると、それまで子どもさんたちのことを学力があまりないと思っておいでだったのに、進学校に遜色なく主題に迫る読解をすることができたということでした。

このようなことを申し上げていると、カイザー先生に「だから漢字をやめた方がいい」と言われそうなのですけれども、漢字にルビを付けることで読解の補強をすることになると思います。国語教育で言うと、全国学力・学習状況調査やPISAテストなど、結果は少し上がってきましたけれども、現状でも日本の子どもたちは読解力がないとよくいわれます。今、全国の先生方は、国語力を上げるのに必死で頑張っておいでです。しかし、誰もこのようなことは指摘していないのですが、私は、実は子どもたちは漢字が読めていないのではないか、漢字を総ルビにしてテストしたら結果は随分違うのではないかと思っています。また、カイザー先生から「だから漢字なんてやめなさい」とご指摘を受けるかもしれませんが…。

しかし、肝心なことは、それほど子どもたちの漢字力が弱くなっているという問題なのかもしれません。

高田　ありがとうございます。「カイザー先生の国籍はどちらですか」という質問が受付に来ています。ご紹介するときに申し上げればよかったのですけれども、先生はドイツの方です。それでは、カイザー先生お願いします。

カイザー　質問には簡略にお答えしたいと思います。一つは字体に関することで、「しょ

シュテファン・カイザー

くへんやしんにょうの問題を非漢字圏から考えてどのように受け止めているのか」ということです。実用の道具としての文字を考えた場合に、旧漢字のときに旧字体のしょくへんやしんにょうを残してしまったことに、むしろ私は非常に驚いてしまいました。非常に単純に言えば、「そんなばかな。簡略化するのであればすべて簡略にしろ」というのが私の考え方です。

もう一つも一部だけにしたいと思うのですけれども、「明治以来の日本のドラスティックな変化、つまり欧米へのあこがれなどをどう考えるか」ということです。文字、漢字と結びつけてお答えしますと、アジアの諸国の中で、非常に西洋寄りの姿勢を取ってきたのが日本だと思います。それなのに、文字に関しては全く遮断しているような感じなのです。鉄のカーテンならぬ「漢字カーテン」と言う人がいるくらいです。つまり、日本からあまり情報が出て行かない、しかし一方では外からどんどん情報を集める。不公平だという立場も当然あると思うのです。

学生のころのことを少し思い出したのですが、ロンドン大学には学生もスタッフも自由に出入りするようなスペースがありました。そこに非東洋人が座って本のページを自由にめくりながら読んでいると、大学中にそのうわさが広まって、みんなが見に行くのです。それほど珍しいことなのです。国際交流基金のいろいろな報告を見れば分かりますが、日本語学習者が海外では非常に多いです。しかしほとんどは小学校、中学校などの学校教育が中心です。もちろん大学もやっていますが、大学で4年間勉強しても日本語が自由にこなせるようにはなりません。私のような変人は別として、何十年もやっていればある程度はいきますが、普通の人には無理なのです。今、せっかく世界中で日本語が学習されているにもかかわらず、やはり自由にこなせる段階には至っていません。そうすると、日本の良き理解者がそれだけ少なくて、結果的には日本は漢字圏の仲間から出られないような状況にあると思うのです。振り仮名、ルビをたくさん付けて、少しでもとっつきやすくするのは第一歩であるかもしれません。

高田　どうもありがとうございます。そろそろ時間になってしまっているのですが、これも複数来ていますので、最後に一つだけ皆さんのご意見をお聞きしたいものがあります。「縦書きと横書きによる違いとしては一体どういうことが考えられるのか」、皆さまそれぞれのご専門のお立場でご見解をお話しくださればと思います。

阿辻　私はもともと中国の古典の文献を読解する研究室にいたので、縦書きに慣れている世代ですが、現在の中国語は教科書も新聞も横書きです。仕事上、古典の文献と現代の中国語の文献のどちらも必要としますが、私はどちらでも内容を理解するのに齟齬はないと個人的に思っています。ただ、伝統的な縦書きの文献が図版に載っていて、その説明が横書きで書いてあるとすごく読みにくいので、目が縦に動くか横に動くかが最大の問題かと思います。

特に今の学生は、圧倒的に横書きの世代です。それはそれで時代の趨勢として私は別に批判するつもりはありませんが、すみ分けではないでしょうか。縦書きが必要である状況

は今後も厳然として存在するでしょうから、その縦書きが必要である状況であえて無理に横書きにすることはありません。そして、横書きの方がむしろ手の動きがスムーズである状況であれば横書きを採用されたらいいのです。書かれる文章が持っている特性あるいは属性によって選択されるのではないかという気がします。

小駒　縦書きを使っているのは現在、世界中でほとんど日本だけのようです。新聞は中国も韓国もみんな横書きになってしまったし、雑誌もそうです。ところが日本の新聞も、それから、驚くべきことには漫画が全部縦書きです。不思議なことに最後の牙城という感じで残っているのです。理由はと言われても、私にはよく分からないのですが、結果として残っています。雑誌の横書きは、古くは創刊のときの「太陽」がそうでしたし、「週刊アスキー」も一時やったことがありましたが、なかなか定着しない。漫画では手塚治虫の「ユニコ」が横書きでしたが、ほかに例を知りません。新聞もなかなか横書きをすることができない。これが現実なのですね。

柴田　テレビは最初から横書きなので、これからも横書きでいくと思います。これは書く道具によって違うのではないでしょうか。例えば筆や万年筆などはあまり横書きには向いていない、シャープペンシルやボールペンだとどちらでもいけるかなというところですが、自分のお墓を横書きにしてくれとわざわざ頼むほどではないだろうと思います。

　ただし、文字が動く場合は、縦に流れていくものと横に流れていくものでは、横に流れていくものは何とか読めるのですが、縦に流れると相当読みにくいということがありますので、動く文字のことを言うと横書きがやや有利になっていくのかなという感想を持っています。

阿辻　芝居の台本やニュースの原稿は縦書きですよね。

柴田　ニュースの原稿は原則縦書きです。音読する場合には、横書きですと行を間違えるケースが非常に多いのです。縦書きだとそんなに起こらないのですが、横書きの場合はよほど注意しないと、同じところを2度読んだり1行飛ばしたりすることがよく起きます。

阿辻　目線の動きが画面でおかしくなるからだと聞いたことがあるのですが、そんなことはないのですか。

柴田　プロンプターといって、空中に文字が表示される装置があるのですが、その場合は慣れですね。横の方が読みやすいという若い人の方が今は増えています。

横山　ＮＨＫのアナウンサーが原稿を縦書きで読んでいるという話は、私どもの研究所が独立行政法人時代に「ことばシリーズ」という刊行物で「文字と社会」の特集をやったときに、ＮＨＫの桜井洋子アナウンサーからうかがいました。先ほど阿辻先生がおっしゃったように、横書きだとアナウンサーの目がちょっと泳ぐような感じになって落ち着かないという実験結果があるそうです。大災害などのニュースを読んでいると、「アナウンサーまで動揺している」というように全国に伝わるとまずいので、そういう要因も含めて縦書きにしたようです。ただ、例えばＢＢＣやＣＮＮなどの海外のアナウンサーが読んでい

横山 詔一

る原稿は必ず横書きであるはずですが、視線がそんなにチラチラ動いている感じがしないことを考えますと、先ほど柴田先生がおっしゃったように慣れの問題なのかもしれないと思います。

柴田　少しシステムが違うのですね。

横山　ああ、プロンプターの表示システムが違うのですね。分かりました。

縦書きか横書きかはもちろん字を書く道具によります。例えば毛筆ですと、やはり横書きは少し難しいでしょう。ただ、今の電子機器のような形ですと横で表示されることがほとんどですので、恐らく馴染みや慣れの問題で、どんどん馴染んだ方向に変化していくのではないかと考えます。ただ、やはり毛筆で書いた文字は改まったものや正式なものというイメージがありますので、いろいろな場面で読み手・受け手に対する待遇やもてなしの意味を込めて、毛筆による縦書きはいつまでも残るのではないかという気はします。

高田　どうもありがとうございます。続きまして、棚橋先生、カイザー先生お願いします。

棚橋　今日お配りした資料は私だけが縦書きの資料でしたので、多分この人は縦書きが好きなのだな、縦書きに執着しているのだなと思われたでしょうが、特にそうではなく、たまたま縦書きにしただけです…。ただ、私は教員養成系大学にいて、小学校や中学校の教壇に立つ学生を育てる立場にあり、書字を大切にしたいと思っています。その立場から申し上げると、特に平仮名は縦書きの方が、字が整いやすいのではないかと思っています。縦書きに発生した文字ですので、縦に書いた方が、文字が整いやすいですし、筆順も収まりやすいと思います。もちろん、漢字や片仮名についても同様なことが言えます。

こんなことが本当にあるのかと思われるかもしれませんが、最近は平仮名の筆順を間違う学生がかなり出てくるようになりました。「まみむめも」の「も」のような、昔からよく指摘される字を間違っている学生はともかく、最近やや驚くのが「なにぬねの」の「な」や「らりるれろ」の「ら」の「ふたになる部分」を最後に書く学生が結構多くなっていることです。縦書きで書いていると、そういうふうには書きにくいのではないかなと思うのですが、横書きだとその方が書きやすいと思うのかもしれません。「らりるれろ」の「ら」は数字の5との混乱ではないかとも考えられますが、書字の立場からもやはり少し縦書きに慣れていってほしいと思います。

横書きだと、かぎ括弧の向きは左が書き出しになりますね。学生たちに縦書きの原稿用紙を渡すと、縦書きでもかぎ括弧のはじまりは左だと思って書く学生がいます。10年ぐらい前に初めてそのような書き方を見たときは、特別な例だと思ったのですが、最近そのように手書きする学生が増えてきましたので、世の中は横書き文化になっているのだなとしみじみと思います。…でも、私はやはり縦書きが好きです。

しかし、このことはそもそも手書きをしなくなったということが大きな問題なのかもしれません。

カイザー　日本人はどうも複雑な方が好きで、単純なものを避けようとする傾向があるように見えます。縦横に加えて、右から左というのもあるのです。例えば車に書くときなどです。前の大学に食品を届けてくるバンが出入りしていたのですが、最初に見て驚いたのは「マジイイ」と書いているのです。「あれっ」と思って、右から読むと「イイジマ」です。会社の名前です。ですから、それも入れて3通りあるわけです。漢字の読み方にしても、音読みには少なくとも3通りあります。だから、古いところを捨てずに温存して、新しいところを加えていくのです。そのように日本文化

を説明する社会学者もいます。名付けて「ブラックホール」です。

高田　どうもありがとうございました。時間となりましたので、このセッションを終了したいと思います。講師の先生方、どうもありがとうございました。